

第2分科会 第1分散会

○愛媛県人教・大洲高等学校からは、人権委員会での子どもたちの自主活動だけでなく、教職員による反差別の授業づくり、しかも、地域の先人たちの部落差別をなくしていくととりくみや生き方を教材化するという、「どうすればより子どもたちに伝わるのか」にこだわった実践が報告された。授業をくぐった子どもたちが、学んだことを人権劇に練りあげるといふ、まさに自主活動と授業づくりがさらに豊かな自主活動を生み出していくのだという実践の確かな流れが明らかになった。

課題としては、人権委員会での子どもたちがどれだけ自分のことを見つめ自分の中の課題と向き合おうとしているのかという、自主活動の出発点へのこだわりを、一連のとりくみの中にどう位置づけていくのかということが出された。

○徳島県人教・吉野川高等学校の報告からも、人権委員会での自主活動の確かさが伝わってきた。とりわけ、AさんBさんの具体的な変容をとおして自主活動が子どもたちをひとつ高みへと押しあげるのだということも明らかになった。

AさんとBさんの姿が「あこがれ」として後輩たちにも伝わりあとを継ぐ活動につながっていること、「アオギリにたくして」のとりくみで学んだ平和と人権への思いも「子どもたちの言葉で語り継いでいきたい」という報告者の言葉があり、今後の展望を確認することができた。

課題としては、自分の思いや意見を伝えることができない「しんどい子」の受け皿をどうつくっていくのかということが出された。滋賀から出された行事を超えた日常の中にこそ「つながりの場」をどう創造するのかという視点と重ねて考えたい。

○香川県同教・一宮中学校の報告からは、とことん自分を見つめるという自主活動の原点が示された。自分となかまを見つめ差別をなくしていこうという思いでつながるために位置づけられたクラスミーティング。そのとりくみの大前提として、教職員自らが自分を見つめ自分を子どもたちに語っていくという「立ち位置宣言」など、子どもと教職員がつながるところからスタートしている実践だった。

真司さんという子どものことが担任から報告された。自分の本当の思いを伝えることができなかった真司さんが、自分のことを認めてくれたなかまの存在、担任の寄り添い、母親の温かさに支えられて少しずつ心を溶かしていった事実が明らかになった。3年最後のミーティングで語った、「自分は人の笑顔を見ることが好きなんだって気づいた。みんなの笑顔を見たら、自分も幸せな気持ちになる。先生、みんな、ありがとう」という言葉が、なかまづくりの豊かさ、チーム一宮の実践の確かさを裏打ちしている。

○東京都同教・南葛飾高等学校定時制からは、生徒たちと「より深くかかわるいとなみ」の報告がされた。学生時代、自分のことが嫌いだった報告者は、南葛外文研の顧問であり、担任だった教師と出会い、それまでの自分を振り返り、「朝鮮人で良かった」と思える自分になっていく。そして、今、南葛飾高等学校定時制の教師として、かつて自分がしてもらったように真摯に生徒と向き合っていく過程が語られた。外文研をとりまく学校の状況厳しさのなかで、自分をさらけ出す向き合い方、目の前の子どもたちとずっと共に生きていこうとする生き方、「いつでも逃げられるからこそ、逃げない」決意の確かさが、「つながりの場」である全同教に集ったわたしたち全員に伝わった。それは「立ち位置をぶれさ

せない」ことの重さと確かさの共有だった。

○大阪市人教・住吉川小学校の報告からは、韓国・朝鮮につながりのある子どもたちが、授業や同じ立場の先輩の話に学ぶ活動を通して、自分のアイデンティティをつかみとっていった実践の道筋が明らかになった。そのことが具体的な子どもたちの言葉や動きに表れていた。

論議と交流の中で、「このつながりの確かさが子どもたちにどんな力をつけましたか」という質問があったが、ここに自主活動の本質があると思われた。「つながる」ことは手段であって目的ではなく、「差別をなくしていく力」を子どもたちにつちかいていかなくてはならないと考える。「常に自分自身の立ち位置を意識し、自分の生き方を考えていきたい」という報告者の言葉の通り、わたしたちの反差別の思いと覚悟が自主活動を左右していくことも明らかになった。

○佐賀県同教・春日北小学校からは、部落の学習棟で行っている学習会で学んだ子どもたちが、なかまを支える行動や人権劇づくりでさらに力をつけ、学んだことを自分たちの生き方につなごうとしている生の姿が報告された。

嫌がらせを始めたグループから「抜きたい」と学習会を頼ってきたAさんを、学習会の子どもたちは、あらゆる場面で徹底して支え守る。報告者もクラスで5時間の特設授業を組み、自分のいじめられていた体験も赤裸々に話し、「痛みを知っている人間だけが本当の強さややさしさをもてるんだ」と伝えていった。

論議と交流の中では、「いじめる側につかないと自分がいじめられる」と感じる子どもの「弱さ」も、しんどい背景を抱えながらも「いじめる側」に立っている子どもの「弱さ」も、どちらも子どもたちのSOSであるとの指摘があった。子どもたちのしんどさに寄り添い、とことん向き合っていけるわたしたちの感性と立ち位置が問われた。

○大分県人教・長浜小学校（実践内容は前々任校）の報告からは、「言いたいことが言える集団、伝えたいことが伝え合えるなかま、お互いを受けとめることができる学級づくり」に向けた、報告者と子どもたちの関係性の深さが明らかになった。

小学校時代、さまざまに問題行動を繰り返してきたAさんが、中学校で報告者やなかまとの出会いを通して大きく変容していくが、その根っこには報告者の毎日の子どもたち全員に対するていねいなかわりがあった。

論議と交流では、とにかくAさんとつながろう、支えよう、なかまになろうという報告者の姿が確実に周りの子どもたちにも伝わり、クラス全体に「この先生にならばくも話せる、わたしも話せる」という安心感を与えていったことが明らかになった。

さらに深めたかったことは、子どもたちが、今、高校生になったその場所で、どんななかまづくり・自主活動をつくろうとしているかという、すべての実践にかかわる課題だった。これは、今後も継続して追究していかなくてはならないテーマと考える。

第2分科会 第2分散会

1. 報告の概要

本分散会では、小学校3本、中学校1本、高等学校3本の報告があった。

- ①問題が起こると、自分の思いをうまく言葉にできず手を出してしまう入学したての小学1年生。子どもたちに、粘り強く言葉をかけ、言葉を引き出し、問題解決の方法を示し続けた。それにより、自分の思いを言葉で表現し、子どもたちが自主的に解決できるようになってきた。そこに至るまでには、子どもと家庭とつながるていねいな家庭訪問をする担任の姿や、悩み、しんどさをお互いに出し合い、解決に向けつながっている教職員集団の姿が報告された。
- ②クラス替えを契機に、子どもたちが、それまで解決しきれていなかったいじめやなかまはずしを解決したいと訴えた。子どもや保護者の思いを受け止め、いじめに真正面から向き合い、絶対にいじめを許さないという担任の思いを子どもたちに伝え、学年集団として取り組んだ。いじめに関して傍観者であった多数を意識変革し、子どもたちを学年集会、なかまづくりのための支援でつなぎ、いじめをしていた本人にもしっかり寄り添いながら問題を解決した。また、人権・同和教育を通して、差別と排除の仕組みがいじめやなかまはずしにも通じる事に気づいていったようすが報告された。
- ③校内に同和教育を組み込む過程で、ムラの人たちを教室に招き出させたり、香川と地元をつなぐ福田村事件の教材化を行い、解放研やクラスで実践したりした。福田村事件を教材とした授業では、母の命乞いを無視して乳幼児まで殺してしまった集団の恐ろしさや集団であるが故の判断できない弱さ、子どもをかくまった刑事への思い、当時の朝鮮人差別の実態などについて、現在の問題(東日本大震災でのデマ)と重ねて学ぶ様子が、教材資料と生徒の感想から詳しく報告された。
- ④部活動単位でのボランティア活動や人権学習など人権の視点に立った活動を積極的に取り組む中、聴覚に障がいのある生徒が入学する際には、全職員で研修会を行い、学年、学校が迎えるための様々な手だてを確認した。一人を受け入れ、つなぐ取り組みが、クラブやクラスをつなぐ姿に現れ、教職員集団の変容となって現れたことが報告された。障がいのある生徒の居場所が部活やクラスにできたことは、「最初はコミュニケーションが上手く取れず苦しい思いもしたが、先生やなかまのおかげで、強くなれた」と本人の発言からも確認された。
- ⑤部落問題とマイナスの出会いをしてきた報告者が、解放子ども会で高校生と部落問題や狭山事件について語り合い、活動を共にする中で、仕事としてではなく同じ一人の人間、「なかま」としてつながり、部落問題に向き合い、子どもたちを取り巻く現実に気づいていった。また、子どもたちが時間をかけ、自分のことを語り、ありのままをさらけ出すことのできる「なかま」を増やし広げていく大切さや、「なかま」が増えることがどれだけ心強いことなのかが報告された。
- ⑥チャレンジ会(補充・解放学習会)に通う常にトラブルの中心にいる子どもの背景を知るために、家庭訪問を繰り返し行った。それに、地域からの情報などもあわせ、全教職員が子どもの様子や背景を共通理解し、母親のしんどさを支えたことで、子どもも母親も変わっていくようすが報告された。また、報告者自身が自分の中にある差別意識に気

づき、人ごとではなく、自分のこととして受け止めやっていきたい、自分がつないでいく人になっていきたいという思いが語られた。

- ⑦「生活を見つめる。語る」を教育活動のすべてに意識的に反映させ、自らと向き合わせ、子どもたちと向き合ってきた。文化祭の部落解放研究会の劇でのセリフにこだわったAは、中2の野外活動での集中HRで自身のことをなかまに語ったこと、厳しい状況に追い込まれた時に対峙した担任の指導などのターニングポイントを経て、強くなっていった。子どもたちを自立へと向かわせ、つながる集団を育てていく学校、一人の人間として子どもたちと真正面から向き合い、取り組み続ける教師の姿が報告された。

2. 討議の概要

これらの報告をもとに、「家庭訪問・子どもの背景をつかむ」「居場所・なかまづくり」「語る・語らせる」「学力保障」などをテーマに熱心な討議がなされた。

- 「教育とは、『今日、行く』こと」「電話より家庭へ」「家庭ぬきにして教育を語るな」「何回も行く、家庭背景を知る」など、家庭訪問をていねいに行い、背景を知り、家庭に寄り添い、子ども・家庭とつながっていくようすが語られた。家庭訪問を繰り返すことで、安心した母親が学校や地域に相談に来るようになった、つかんだ背景や子どものようすを教職員集団で共有し指導に活かしているなどの報告もあった。
- 「(あの子どもたちにとって)学校は家やねん」「なかまがかけてくれた言葉で、自分がなかまに支えられていること、自分の居場所があることに気づいた」「『なかま』が一人増えたことがこんなにも心強いことなのだ、これが人の世の熱なのか」など、居場所づくりの大切さ、自分のことを語ることのできるなかまができることの大切さが報告された。また、学校、地域とのつながり、教職員同士がつながり、しんどい事も何でも言い合える、学校がこれまで築き上げてきた大切なことを引き継いでいくなかま、つながり作りの大切さも語られた。
- 「自分の生活をみつめ、みんなの前で語る」そのために、子どもの背景をつかみ、子どもの話を心からしっかり聴いて、それに対し返していく様子が語られた。そこには、本気で一人の人間として向き合う教師の姿があった。当事者の方から、「話を聞いてくれない、子どものことを見ていない、『本当に私らのしんどさがわかるとるんか』」とっていたが、今日の先生は、あつたかかった」「マニュアルが欲しい、型通りのことしか言ってくれない先生が多い中、一人ひとり本当に見てくれる先生がいるんだって嬉しくなった」などの言葉がかけられた。
- 「何のために学ぶのか。エエ高校行って、人をバカにするのか。親の姿をバカにするため勉強するのか」「何のための学力か若い教師に問うていきたい」など学力保障に関して討論が進められた。その中で、高校生が狭山の現地調査で石川一雄さんから学んできたことが報告された。一つは「勉強しなさい」（差別やおかしいことは伝えることができる学力、しんどい子の気持ちが分かる力、つないでいくことのできる力）であり、もう一つは「なかまを大事にしなさい」であった。

3. 今後の課題

- ・一会場で7本の報告は多すぎ、それぞれの報告の質疑応答で時間を費やし、討議の時間を十分にとることができなかった。それぞれのレポートから、まだまだ、明らかにされるべきよさがあったのが、引き出せずに終わっている。また、討論の時間不足のため、部落問題についての討論やなかまづくりなどの実践交流が十分には深めることができなかった。